

造形感覚の発達とその指導 (I)

中 野 満 男

I. ね ら い

造形感覚を練り高めることは、それ自身図工科の教育目標の一つであるばかりでなくて、創造力とか技術とか知識とかいうような他の教育目標を有機的に結び合わせる紐帯でもあると考えられる。

しかし、これ程に図工科教育の根幹的位置にあると考えられる造形感覚というものが、現在のところあまり明確に把握されているとは言えない。

生徒がどの程度の感覚をもっているのか、という疑問、そしてそれをどこまで高めたらよいか、または高め得るかという疑問は、教材の選択やその組み合わせを考えるとときに、あるいは作品評価の方法や基準を定めるときに、そして授業の時生徒に向って発することばの一つにさえもいだかざるを得ない。

そうしたときに我々が仮設する生徒の感覚というものは、殆どが極めて主観的な経験に基づいて思いえがいたものにすぎない。

これにいくらかでも、客観的な条理をとり入れることはできないものだろうか。たとえその大部分を経験と勘に頼らざるを得ないにしてもそれを補助する程度のものでよいから、明瞭に断定を下せるものはないものだろうか。

もしそれができたら、日々の授業はもっとはっきりしたやり方で、もっと気持よく行うことができるにちがいない。こうした欲求によってしかし、成果に関しては全く見通しもつかぬままとりかかったのがこの研究であった。

II. 考 察

この問題について解決の方法はあり得ないとする考えもある。感覚というものが、時代や環境や個人的な性格、年齢、知能等複雑な要素と

合成されていて、その調査にあたってそういう条件をとりのぞくことが不可能に近いことは考えられる。また、感覚というものがそれ自体主観的なものであり、そして時代や環境によって左右されるものだけに絶対的なものが考えられないことも、この研究を更に難しいものにするであろうと思われた。

前者の障害については、如何なる調査によっても、その一つ一つについて明瞭な結果は期待せず数多くの調査の結果を総合した後に、ある程度の結論を出すことになるだろう。そしてかなり長い期間にわたる持続的で、多角的な調査が必要と思われた。

後者の障害については、あくまで美感覚の規範を作ることを避け、目標を絶対的な感覚に求めるのではなくて、生徒の感覚の実態を求めることにおくことに注意しなければならないと思った。

この問題については、その内容はおろか、輪かくさえも判然としていない。そのためにこれを論理的に究明することが現段階では不可能である。それでこの問題に対して、いわばさぐりを入れるような態勢で始めざるを得なかったわけである。

しかし、どこからとりかかるにしても、可能なかぎりの計画性を保ち、それに基いた問題の簡素化と、焦点のしぼり方があらねばならないと考えられた。今回は、その一つの方法としての構成原理による造形美の要素の分類によってみることに決めたのである。

III. 調 査 と 結 果

第一回の研究調査のために、この造形要素の中から、

- (イ) 対称・不対称
- (ロ) 主題と従属・対比

の二つを選んだ。

そして、(イ)においては、生徒は対称的な美と非対称的な美とのどちらをより好むか。(ロ)においては、主題と従属による美しさと対比の形による美しさとのどちらをより好むか、という調査を行うことによって、生徒の造形感覚のどこかの点に、ふれることができるのではあるまいか。という期待をもったわけである。

方法は、最近しばしば見られるアートテストに似た方式によって、一組幾枚かの図を示してその中で最も好ましいと思うもの一つを選ばせるものを行い、これを整理集計して見ることにした。

まず、一組の図の枚数は2枚と定めた。例えば(イ)の調査にあっては、この2枚のうちの1枚を対称的な形のもの、あとの1枚を非対称的な形のものにする。この2つのものは、造形形式がこのように異っているだけで、その美的価値においては、できうる限り同じものとする。

(しかし、この美的価値を同じくすることは、実は非常に困難なことであり、自分の主観だけでは、とうてい理想的なものにすることはできない。本研究の最大の欠陥はこの点にあったであろうことは、後で述べることにする。)

図にあらわすものは、抽象的なものをあつかった場合の欠陥が、既に明らかになっているので、全部をごくわれわれに身近な、見慣れた品々を素材とした。しかし実用品を示して美的な好悪の判断を求めた場合には、実用的な良否、流行等による価値判断が介入するおそれが多分にあり、そうしたものを一切考えないで、色として、形として見て比較せよ、と言っても、そうした連想はなお完全に切り離すことができない。そのためにこの調査のための図版の作製および実施にあたって、次のようなことに注意をした。

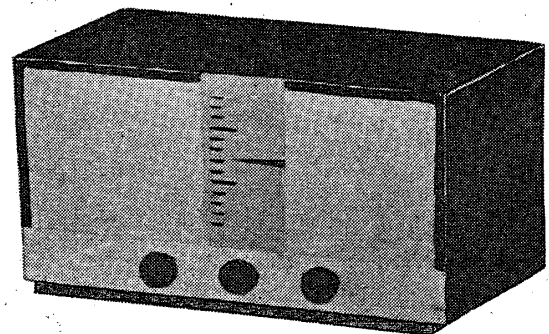
1. 今回の調査は形体の感覚の研究とし、そのために、色彩は2枚の図にできるだけ同じ色彩をほどこす。
2. 流行に左右されるものはできるだけ素材として選ばない。
3. 実用的な価値、材質感などは2枚の図ができるだけ同等であるようにする。

4. 実施にあたって、実用性は考えずに判断するように言葉で補足する。

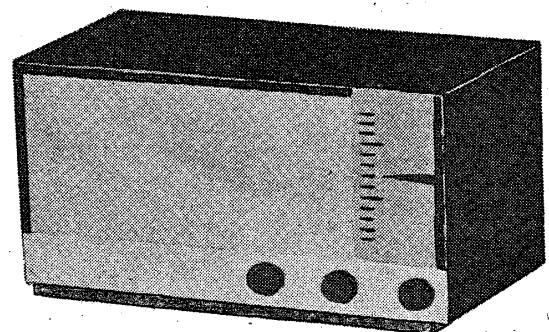
前述の(イ)(ロ)の各々の主題に従って、作製した図版の内容は次のようなものである。

- (イ) 1. 置時計
2. 皿の模様
3. アルバムに貼られた写真の配置
4. 花壇の形
5. ラヂオのキャビネット
- (ロ) 1. 建築物
2. 室内の戸棚の配置
3. 箱に貼ったレッテル
4. ポスター
5. 池とテラス

(ここでは(イ)の5を1つだけ図示するに止める)。



A



B

これらを一組ずつ黒板に貼って、それぞれの中で好きな方を選んでAかBかを記入させたのであるが、(イ)(ロ)各5枚のものを続けて掲示すると各々の主題の特徴がわかることになり、その結果感覚的に判定せず、観念的に決めることになるかもしれないので、(イ)と(ロ)を交互に一組

共 同 研 究

おきに組み合わせて提示した。

これを集計，整理したものが次の表である。

(表 1)

		(イ)										(ロ)									
		1		2		3		4		5		1		2		3		4		5	
		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
中 1	男	35	16	39	12	18	33	39	12	8	43	43	8	42	9	24	27	40	11	25	26
	女	31	16	42	5	11	36	40	7	9	38	42	5	40	7	18	29	37	10	24	23
中 2	男	43	11	33	20	27	27	49	6	14	40	51	3	37	17	30	24	39	15	25	29
	女	36	17	33	22	15	38	40	13	9	44	49	4	32	21	29	24	36	17	17	36
中 3	男	42	16	21	37	23	35	35	23	9	49	53	5	31	27	35	23	34	24	41	17
	女	25	22	19	28	14	33	28	19	6	41	39	8	15	32	18	29	33	14	32	15
計	男	120	43	94	69	68	95	122	41	31	132	147	16	110	53	89	74	123	40	91	72
	女	92	55	94	53	40	107	108	39	24	123	130	17	87	60	65	82	106	41	73	74
高 1	男	8	10	6	12	3	15	8	10	1	17	17	1	10	8	11	7	11	7	11	7
	女	9	4	7	6	3	10	4	9	2	11	12	1	4	9	9	4	7	6	10	3
高 2	男	11	8	3	16	11	8	8	11	3	16	17	2	11	8	10	10	17	2	13	6
	女	8	3	4	7	2	9	9	2	2	9	9	2	5	6	8	3	7	4	10	1
高 3	男	13	10	14	9	4	19	16	7	3	20	5	18	7	16	11	12	12	11	11	12
	女	6	2	3	5	5	3	4	4	1	7	1	7	2	6	5	3	5	3	4	4
計	男	32	28	23	37	18	42	32	28	7	53	39	21	28	32	32	28	40	20	35	25
	女	23	9	14	18	10	22	17	15	5	27	22	10	11	21	22	10	19	13	24	8

この調査を総体的に眺めてみると、(イ)においては、図版によってAかBかいつれかに、ましまちに偏っていて、一貫した傾向を示す偏り方になっていない。これはA、B 2枚ずつの図がその美的価値において、同程度であるとした前提が相当に誤っていたか、もしくは生徒の感覚との間に大きなずれがあったことによるものと思われる。結果を急いだことに、今回は第一の段階として模索的な調査であるという気安さが手伝って、この点に注意を怠り、周到な用意がなかったことが反省される。例えば、一組の図版をはじめから2枚とせず、先ずA一枚に対し、これに対応するBを数枚用意し、一方の学級で、その数枚のBの中からAと同じ程度に好ましいものを一枚選び出して、これを正確なBとし、もう一方の学級で、そのA、B 2枚を比較

するというような方法も考えられたであろう。

(ロ)の調査においても同じようなことが言えるが、全体にAがBよりもやや多く、対比的な強い美しさよりも、主題と従属の関係をもった整然たる美しさを好む傾向があることがうかがえるが、断定を下し得るほど明瞭な特徴となっていない。

また、(イ)(ロ)を通じて、高学年になるほどAよりもBを好む傾向が強くなるようであるが、これも高校生の調査対象人員が少ないために、直ちに、断定することのできる数字とはなっていない。やはりこの調査では対象になった人員が少なかったことが研究結果を弱める大きな原因となった。殊に高校生を対象としたものにおいて著しい。

この表では、男女の差がほとんど認められな

造形感覚の発達とその指導 (I)

い。

次に、この調査を図工科の総合的能力との比較において研究して見たら、何らかの相関的關係を示すのではあるまいか。という考えから、図工科の成績のよいものと悪いものとを分けてその好みを比較することを試みた。

図工の成績のよい、悪い、は昭和32年度2学期の期末評価に基いて、図工の評価が5および4のものを上位、3のものを中位、2および1

のものを下位とした。そしてその中の中位を除いて、上位と下位のものの比較を行った。

これが次の表になるが、各生徒が(イ)(ロ)各5組の図の中で、Aをいく組好んでいるかということのるい計であり、つまり(イ)にあっては対象形を好む度合、(ロ)にあっては主題と従属の様式を好む度合になるわけである。

なお、高校は人数が少いためにこれを除外し中学校3学年のみとした。

(表 2)

図工成績	人	Aを選んだ数	(イ)					(ロ)						
			0	1	2	3	4	5	0	1	2	3	4	5
中1	上	40	1	3	15	14	5	2	0	2	5	14	16	3
	下	28	1	2	3	5	14	3	0	1	2	8	12	5
中2	上	41	2	6	13	9	7	4	1	3	5	17	13	2
	下	26	1	0	7	7	7	4	0	2	3	8	8	5
中3	上	41	4	8	13	13	3	0	2	1	10	11	12	5
	下	25	2	9	4	7	2	1	0	0	6	9	8	2

また、上の表に基いて、このAを好むるい計を平均点として表わしたのが次の表である。ここで、もしこの好みが、AとBと相なかばしているとすれば、その平均点は2.50となるわけであって、仮にこの点数に標準というやうなものを考えるとすれば2.50がそれである。

(表 3)

		(イ)	(ロ)
中1	上	2.63	3.33
	下	3.36	3.78
中2	上	2.61	3.07
	下	3.19	3.42
中3	上	2.07	3.10
	下	2.04	3.25

もともとAとBとはその美的価値において同様であるように、——正確に言えば、同等であると思って——作製したものであって、上位と下位によって、その好む傾向が異なるはずがないのである。しかし表3を見れば、(イ)(ロ)共に上位

が下位に比較してAを好む度合が少い。つまりBをより好む傾向がある。しかし、その上下位の傾向の差は学年が進むにつれて薄くなりながら、なお全体として次第にBを好む度合を強めて行く、ということが認められそうでもある。しかし、直ちにここでそうと判断するには、あまりにもそのあらわれ方が微弱であるというべきであろう。また、かりにそうであるとしてもその原因がどこにあるか、教育効果か、発達の当然の段階か、環境によるものか、貧弱な現在の調査結果からは、とうてい判断を下すことはできない。表2によって見ても、0とか、5とか、好みの傾向がはっきりしているものが、上下位ともにあることを考えれば、これには特に個人的傾向の強いことが明らかであって、上述のようなことを超越した個別的な性格に大きく左右されるものかも知れない。あるいはもう一度もとへかえって考えるならば、表現が主となり、技術も加わった成績表の評価によった上下位の区別でもって、感覚と比較しようとした点に問題があるのかも知れない。

IV. これからの課題

ともあれ造形の感覚というものが、極めて複雑な要素と共になり立っていて、これを明確に把握するには、相当長い期間にわたる多角的な問題のとり上げ方と、数多くの調査によらなければ不可能であることをあらためて思い知らされ、また、調査研究の方法自体にもなお大きな欠陥をもっていて、今後の問題としてのこされていることを反省しなければならなかった。この大きな研究題目から見れば、今後の研究の方向を定める上に、これが唯一の収穫であるとしかいうことができない。

更に大きな問題がなお一つのこされている。

それは、この調査で知ろうとした生徒の造形的な好みの傾向、つまり生徒が造形を「感じる能力」を、図工科教育にとってはもっと大きな目的であるところの造形を「表現する能力」との関係において明らかにしなければならないことである。この二つのものは、たしかに密接不離な関係にあるものである。それゆえに、この二つは相併行して研究することが可能ではないかと思われる。そしてこれがこの研究の最後の目標にまでつながるものであって、この研究を生きたものにするかしないかの鍵となるであろうと思う。